

# ヨエル書とラオデキア的なセブンスデー・アドベ ンチスト教会 - 第四十三号

Jeff Pippenger

2026-02-09

## 第四十三番

八十人の人間の祭司と神なる大祭司との結合の象徴は「81」という数であり、これは、書物『Early Writings』においてミラーの夢が見出される箇所である。黙示録「81」において、まさに最後の封印が取り除かれるとき、天には半時間の沈黙があることを見いだす。ハバクク書2章20節は、主がその聖なる宮におられるとき、全地は沈黙を守るべきであると述べている。

そして、彼が第七の封印を解いたとき、天においておよそ半時間のあいだ沈黙があった。ヨハネの黙示録 8:1

三十日の期間において第七の封印が解かれる。というのは、それが最後の封印だからである。2023年12月31日、エゼキエルの骨は復活の過程を開始した。その後、キリストは四十日の間、教え始めた。その日付は、2020年7月18日の失望以来の一千二百六十日の終わりを画したのであり、ヨハネは『黙示録』第十一章において、我々は神殿を測るべきだが外庭は除外するようにと告げている。外庭は散らしの終わりに終結する。というのは、ヨハネが、外庭である異邦人に一千二百六十日が与えられていると告げているからである。測るに際しては、その歴史は除外すべきである。

ミラーが目覚めて塵払いの男を見ると、部屋は空であり、彼が声を上げるとき、ミラーはいまだ荒野にいる。復活の歴史から日曜法直前に至るまで、キリストは、1798年から1844年に至る四十六年間になさったのと同様に、十四万四千人から成る神殿を築き上げておられる。

彼が教えを始めるとき、彼は彼の神殿で働いている。とりわけ、その三十日間においてである。そのとき、御使いたちは三十分間沈黙を守る。彼が、ミラー派の説教者三百人という彼の祭司たちを教え、あるいはギデオンの三百人という彼の軍勢を教え、または1843年の図表三百枚を公刊している間である。そして彼は、これらすべてを、種なしパンの終わりからラッパのメッセージに至るまでの三十日間に行う。彼はミラーの部屋の床を掃いている。しかしそれは彼の床であるゆえ、ミラーの部屋は彼の神殿である。彼は、十四万四千の中に数えられる候補者として召された者たちについて、その罪を抹消するか、さもなくばその名を抹消するという働きを仕上げつつある。

昇天の五日前、かつ審判の十日前に到来するラッパの告知は、リトマス試験紙である。天が静まっている三十分間、あるいはキリストが祭司たちを教える三十日間に起こることは、ラッパ・昇天・審判という三段階の過程において印が押される時点には、すでに二つの階級を生み出している。これは明白である。

ラッパを吹き鳴らして告知すべき時に至りながら、その告知を発することを拒むなら、任務に失する。

「ラッパ、昇天、裁き」という三段階は、歴史の初めに「死、埋葬、復活」によって一つの道標が表されていたのと同様に、三段階から成る一つの道標である。終わりにおける三段階の試験は、五旬節の日曜法に先立つ五日前のリトマス試験紙である。

復活から五日後、種入れぬパンの祭りの終わりが到来し、その聖会は2024年の第一にして基礎的な試練を画する。あなたは天からのパンを食するのか、それとも人間の理性というパンを食するのか。その試練は2024年に到来したが、すでにアダムとエバ、ニムロデ、アロン、ヤロブアム、コラとその一党、ミラー派運動の歴史におけるプロテスタントたち、ジョン・ハーヴェイ・ケログのアルファの反逆、1888年の反逆、そして言うまでもなく9/11の反逆という基礎的的反逆によって予表されていた。カインの基礎的的反逆は、兄弟に対する嫉妬という問題を指し示しており、そのことは基礎的的反逆の系譜全体にわたって貫かれている。

根本的的反逆の例はすべて神に対する反逆であるが、そのうちのいくつか、たとえば1888年の反逆者たちやコラの反逆者たちには、選ばれた使者が試みの一部をなしているという事実が含まれている。ダニエル書11章14節において幻を打ち立てるのはローマであるとするミラーの同定を拒むことは、メッセージと使者の双方を拒むことである。この試みは根本的である。というのも、14節の略奪者をローマと同定したのは、ミラーだけでなく、ミラーの息子もそうであったからである。

2023年12月31日の復活から五日後、ミラーの準備的教導の務めは、ヨハネの後に来られた方によって引き継がれた。三十日間、神殿の礼拝者たちには、キリストによって「顔と顔を合わせて」特別の教示が与えられることになっていた。その備えは、ラッパの祭りの警告のことばを宣べ伝えるための、八十人から成る祭司団を整えることにあった。

三十日の備えは、初めにおける基礎的な第一の試験と、終わりにおける第二の神殿に関する試験とから成る。第二の神殿に関する試験は、ラッパが吹き鳴らされる前に完了する。ゆえに、この細部は、キリストが宝石を小箱に投じたときのミラーの夢において表象されている。彼がこれを行った後に、ミラーを「来て見よ」と招く。ラッパの警告から裁きのための昇天に至るまでの間に、日曜法に先立って旗印が掲げられる。ミラーが「来て見よ」と招かれる前に、宝石はすべて神殿の内にあり、二人の証人が雲の中に上げられるとき、その敵は彼らを仰ぎ見る。

彼らの、2020年に不首尾に終わったイスラムからの攻撃に関する予測は、スノーの真の「真夜中の叫び」がそうであったように、修正を経てから繰り返されるべきである。ミラーは、自ら「真夜中の叫び」であると見なした理解を有していたが、サミュエル・スノーがミラーの「真夜中の叫び」のメッセージを修正した。このため、ミラー派の歴史において、スノーの「真夜中の叫び」のメッセージは「真の」真夜中の叫びのメッセージと呼ばれている。「真夜中の叫び」のメッセージとは、修正を経たメッセージであり、その修正によって力を帯びたものである。

失望した人々は、聖書から、自分たちが遅延の時期にあり、幻の成就を忍耐して待たなければならないことを悟った。1843年に主を待ち望むよう彼らを導いたのと同じ証人が、1844年には主が来られると期待するよう彼らを導いた。『Early Writings』247ページ。

その現象は1840年から1844年に至る期間の終わりに起こり、またその始まりにも起こった。ジョサイア・リッチは、1840年におけるイスラムの成就を予言した。彼は1838年にその予言を公に記録し、その後、1840年8月11日の十日前にそれを訂正した。その訂正された予言の成就是、第一天使の使命に勢いを与えた。第二天使の使命は、訂正された真夜中の叫びのメッセージによって勢いを与えられた。一つの歴史から出る二つの証人があり、それはアルファの証人とオメガの証人である。彼らは共に、先行するメッセージの訂正に基づくメッセージの勢いづけを指し示している。

アルファはイスラムに関する預言を指し示し、オメガは閉ざされた戸に関する預言を指し示す。「行に行、規則に規則」により、1840年のイスラムと1844年の閉ざされた戸は、イスラムと閉ざされた戸を「真夜中の叫び」のメッセージとして指し示す。メッセージの始めにおいては、キリストの凱旋的エルサレム入城の時のように、イスラムは解き放たれる。その時点で、十人の乙女のたとえにおいて戸が閉じられ、同様に、神の家の裁きにおいても戸が閉じられる。メッセージの結末においては、アメリカ合衆国に対して戸が閉じられる時、イスラムは再び一撃を加える。

レビ記二十三章によって描き出される線が、初めに過越祭の三つの段階を、終わりに祭司たちの三つの段階を指し示していることを理解することは重要である。祭司たちは日曜法の時にささげ物として高く掲げられるが、その出来事に先立って清められる。彼らが高く掲げられるとき、彼らは旗印となり、また、線の初めにおける三つの段階においてキリストが高く掲げられたとき、彼は全世界を御もとに引き寄せた。十四万四千人が高く掲げられることは、キリストが高く掲げられることをもって始まったその線の終わりである。初めと終わりの双方において、三つの段階から成る一つの道標が特定されている。

冒頭に三つの段階があり、その後に五日が続き、結末にも三つの段階があり、その後に五日が続く。その時点以降、叙述の主題は大群衆へと移る。というのも、祭司職は確立され、十四万四千の旗印となったからである。仮庵の祭りの七日間は、異邦人のための期間である。もし、日曜法に始まる異邦人の時を除外し、さらに2023年に終わった三日半をも除外するなら、2023年12月31日から間もなく到来する日曜法に至るまでの五旬節期の五十日のうちに、十四万四千の神殿が表象されていることになる。

乙女たちには復活後五日が与えられ、その後の三十日は祭司たちのためである。次いで、乙女たちからのラッパのメッセージの五日間があり、四十日が満了する時、乙女たちの昇天をもってそれは終わる。続いて、審判に至る五日があり、さらに日曜法に至る五日が続く。乙女たちの象徴としての数「5」は、乙女であり、かつ祭司でもある十四万四千人の歩みを示している。

三十日に及ぶ教えの期間中に、最後の第七の封印が解かれ、そのときミラーは宝石が回復されるのを見る。「来て見よ」は最初の四つの封印に基づく象徴であるため、第七の封印が解かれたとき、ミラーは「来て見よ」と告げられたが、天の御使いたちは皆、沈黙

のうちにただ見守っている。ミラーの夢は、宝石にたとえられた十四万四千人の封印を指し示すと同時に、真夜中の叫びというメッセージを表す宝石をも指し示している。そのメッセージは、封印を成就させる力を乙女たちに授け、また、塵払いの人は、使者とメッセージの双方を支配しておられる方を指し示している。

2024年は基礎の試練に当たり、今や2026年には神殿の試練が到来している。私たちは今、キリストが教えておられる三十日の期間にあり、この事実を認識しないことは致命的である。

メッセージとその使者を認識することは、ローマによる幻の確立によって表象された根本的な試練の一要素であり、また、エリヤとアハブの物語の一要素でもある。

ユダの王アサの第三十八年に、オムリの子アハブがイスラエルの王となり、アハブはサマリアで二十二年イスラエルを治めた。オムリの子アハブは、彼以前のすべての者にまさって、主の目の前に悪を行った。彼にとって、ネバトの子ヤロブアムの罪に歩むことが軽い事であったかのように、彼はシドン人の王エテバアルの娘イゼベルを妻にめとり、行ってバアルに仕え、これを拝んだ。彼はサマリアに建てたバアルの宮に、バアルのために祭壇を築いた。またアハブはアシェラ像を作った。アハブは、自分より先にいたイスラエルのすべての王以上に、イスラエルの神、主の怒りを引き起こした。彼の時代に、ベテル人ヒエルがエリコを建てた。彼は長子アビラムをもってその基を据え、末子セグブをもってその門を立てた。これは、主がヌンの子ヨシュアによって語られた御言葉のとおりであった。ギレアデのティシュベ人エリヤがアハブに言った。「私がおの御前に立つイスラエルの神、主は生きておられる。これらの年の間、ただ、私の言葉によるのでなければ、露も雨も降らないであろう。」列王記上 16:29-17:1.

アハブに関連する数は、当該箇所文脈に資する。「三十八」は「立ち上がり」を象徴する。イスラエルは三十八年目に「立ち上がれ」との命を受け、約束の地に入るよう命ぜられた。

「今、立ち上がり、ゼレデの谷川を渡れ」と私は言った。そこで、われわれはゼレデの谷川を渡った。われわれがカデシュ・バルネアを出てから、ゼレデの谷川を渡るに至るまでの期間は三十八年であった。主が彼らに誓われたとおり、戦いに出る者の世代が宿営のうちからことごとく絶え果てるまでであった。申命記 2章13、14節

イエスは、三十八歳の足なえの男に「起きよ」と言われたとき、彼を癒された。

そこに、三十八年の患いを患っていたある人がいた。イエスは彼が横たわっているのを見、また彼がもう長い間そのような状態にあったのを知って、彼に言われた、「あなたは癒されたいのか」。その病人は答えた、「主よ、水が動かされる時、私を池に入れてくれる人がありません。私が行く間に、ほかの者が先に降りて行きます」。イエスは彼に言われた、「起きよ、床を取り上げ、歩め」。すると、ただちにその人は癒され、床を取り上げて歩いた。また、その日は安息日であった。ヨハネによる福音書 5:5-9.

ジョサイア・リッチは1838年に予言を行い、1840年にそれを精緻化した。申命記でモーセが言及する第三十八年は、同時に第四十年でもあった。ジョサイア・リッチの二段階の過

程は、彼と同名のヨシヤ王における二段階の信仰復興と並行していた。38と40という数は、その相互関係において上昇を表し、これは二人の証人が雲に引き上げられるときに起こることである。

リッチにあって、その高挙は第二の災いのイスラムのメッセージによって成就した。キリストの昇天を印とする高挙は、イスラムのラッパのメッセージの後に到来する。ラッパ・昇天・審判という道標のうち、その最初の二段階（ラッパと昇天）はリッチによって予表され、そして彼の二段階は、ヨシヤ王の二段階の復興と改革によって予表された。申命記においては、立ち上がって約束の地に入るようにとの命令が与えられ、日曜法における旗印の掲揚は同一の約束である。

アハブは二十二年にわたって統治した。それゆえ、彼は神性が人性と結合する期間、すなわちラッパのメッセージに先立つ三十日の期間に統治する。アハブはトランプであり、彼はごく近い将来イゼベルと結婚するであろう。トランプの治世においては、雨に関するメッセージを持つのはエリヤただ一人である。この事実は根本的である。というのも、十四万四千の運動は「行に行を重ねる」という方法論を旨とする運動であり、その方法論は、十四万四千の改革運動が聖史のすべての改革運動によって予表されてきたという根本的真理に基づいているからである。それらの運動のそれぞれにおいて、指導者たちは試みの過程の一部を成していた。毎回そうであった。

アハブはヤロブアムから数えて七代目の王であり、アハブが日曜法の危機において国家を表していることを、私たちは繰り返して示してきた。私たちはまた、ラオデキヤ的なセブンスデー・アドベンチスト教会が1863年にエリコを再建し、その代償としてホワイト家が長男と末子を失い、そしてそれが日曜法におけるエリコを予表していることを示してきた。1863年は日曜法を予表する。

当該箇所は、その時期が十四万四千人の封印であることを指し示す象徴に満ちており、その時期において、ハバククの1843年の図表に掲げられた一つの真理についてのミラーの理解を拒むことは、根本的な反逆であって、神に選ばれた使者を、「会衆は皆聖である」と主張したコラの反逆者たちおよび1888年の反逆者たちと同じ口実のもとで、顧みないことを含む。

われわれは今、天の窓が開かれ、経綸的な扉もともに開かれる、その神殿の試練の時にある。経綸的な扉は、祭司たちがラオデキヤの祭司からフィラデルフィアの祭司へと移行することを標示する。それは、ミラーの夢における偽りの宝石と真の宝石との分離を画する。その窓は、呪いか祝福かを明らかにする。マラキ書三章は、その試練の前提を「立ち帰ること」に置いている。ミラーの夢は、祭司職とメッセージの双方の回復を強調している。ヨハネの黙示録十九章は、イスラムのラッパのメッセージに関するある予告が成就するときに興される主の軍勢を明らかにしている。

ラッパのメッセージの試金石に先立つ試験は第二のものであり、神殿の試験である。ミラーの夢は二重化をもたらし、これは常に第二の試験と結びつけられている。というのも、ミラーの夢では宝石がメッセージであると同時に使者でもあるからである。神殿の試験は、後の雨における「行に行を加える」方法論の適用を含む。それは、さまざまな預言のラインにおいて神殿を見出し、メッセージを整合させることを祭司たちに求める。塵払いの

男のより大きな小箱は、十四万四千の神殿であり、マラキ書の宝物倉もこれと同一である。神殿の諸器具の中心は契約の箱であり、それを覆うケルビムたちが絶えずそこに目を注いでいる。こうして、すべての聖なる存在の焦点がそこにあることが強調される。この歴史における聖徒たちは、神殿を仰ぎ見、契約の箱を凝視すべきである。

十四万四千人の神殿はレビ記二十三章の主題であり、そこには、ホワイト姉妹が「ペンテコステの季節」と呼ぶ事柄においてキリストの時代に成就した一つの歴史的な筋道が提示されている。復活からペンテコステに至るまで、あるいは2023年12月31日から日曜法に至るまで、レビ記二十三章の預言的な筋道は、十四万四千人の神殿を表している。その歴史は、三つの段階から成る道標とそれに続く五日によって始まり、終わりもまた、三つの段階から成る道標とそれに続く五日によって結ばれる。アルファとオメガの諸歴史の中間には、祭司の封印の三十日間がある。その全体の筋道は、第七日安息日で始まり、七年目の安息年で終わる。この水準において、十四万四千人の神殿は、新しくされた地へ八つの魂を運ぶ箱舟であり、また、二人の天使に覆われた契約の箱でもある。ちょうど、ペンテコステの季節によって表象される十四万四千人の祭司職の神殿に対して、二つの安息が陰を投げかけているのと同様である。

レビ記二十三章は、キリストの復活に始まり五十日後の五旬節の日まで続いた五旬節期の最終的な顕現における十四万四千人の祭司職を扱っている。レビ記二十三章の冒頭二十二節を末尾二十二節と対応づけると、五旬節期が確立される。ウィリアム・ミラーの夢は、神の御言葉の宝石が、メッセージと使者の双方であることを明らかにしている。

私は、経験を得るための貴重な機会が与えられてきました。私は第一、第二、第三の天使のメッセージにおいて経験をしてきました。天使たちは天の中空を飛び、世界に警告のメッセージを宣言し、この地球の歴史の終わりの日々生きる人々に直接関係するものとして表されています。これらの天使の声を聞く者はいません。というのも、彼らは、天の世界と調和して働く神の民を表す象徴だからです。神の御霊に照らされ、真理によって聖められた男女が、三つのメッセージをその順序に従って宣べ伝えるのです。『ライフ・スケッチ』429頁。

天使たちは、その天使によって表されているメッセージを宣べ伝える神の民の象徴である。

時は短い。第一、第二、第三の天使のメッセージは、世界に伝えられるべきメッセージである。私たちは三人の天使の声を文字どおりに聞くのではないが、ヨハネの黙示録におけるこれらの天使は、地上にあってこれらのメッセージを告げる民を象徴している。

ヨハネは見た。「大いなる権威を持つもう一人の御使いが天から下って来て、その栄光によって全地が照らされた。」黙示録18章1節。その働きは、世界に警告のメッセージを宣べ伝える神の民の声である。『1888年資料』926。

天使は、天使が表すメッセージの伝達者である人々を象徴する。ウィリアム・ミラーは、多くの適用において予言的に表象されている。その一つは、彼が宣べ伝えるよう導かれた最初と最後の時の預言によってミラーが表象されている、というものである。1798年に終わった七つの時、すなわち2520年はミラーのアルファの発見であり、1844年10月22日に

二千三百の夕と朝の終わりにおける聖所の清めはミラーのオメガの発見であった。1798年から1844年にかけてのミラー派の歴史は、第一と第二の天使の歴史であったが、その歴史の使者の名によって呼ばれている。ミラー派の歴史は、ミラーが第一と第二の天使のメッセージを宣べ伝える「声」であったことを示し、第一の天使は1844年10月22日に審判の始まりを告知し、また第一の天使は、イスラエル王国の七つの時にわたる散らしが終結した1798年、すなわち終わりの時に到来した。ミラーは、2520年の預言と2300年の預言の双方の象徴である。

1798年の最初の道標は、二千三百年が1844年10月22日に満了するとき、裁きが始まることを告げた。その後、主は第七日安息日の光を啓示され、御業を完成することが主のみこころであったので、1856年に「七つの時」に関するさらなる光をお開きになろうとされたが、信仰の代わりに反逆が顕わになった。「七つの時」はミラー派の歴史のアルファであり、二千三百年はオメガである。

七つの時は七年目の安息年によって表され、二千三百は第七日の安息日によって表される。ミラー派の歴史は1798年と1844年によって表され、1798年は七つの時を、1844年は二千三百年を表している。これら二つの安息は、レビ記二十三章において表されている歴史の両端をなしている。これら二つの安息は、一つのメッセージを構成する二つのメッセージを表す。この二つのメッセージはミラー派を表している。というのも、そのメッセージを宣べ伝える民は、そのメッセージを象徴する天使を表しているからである。1798年に第一の天使が到来し、1844年に第三の天使が到来した。

レビ記二十三章には七つの祭りや七つの聖会が定められている。ただし、すべての祭りが聖会であるわけではなく、その逆もまた同様である。これらの祭りは、最初と最後の聖会のあいだにすべて位置づけられており、すなわち、始めは第七日安息日、終わりは安息年（第七年）である。これらの祭りの歴史は、ウィリアム・ミラーとミラー派を象徴する二つの安息日により両端を画されている。

レビ記二十三章において、冒頭の二十二節と末尾の二十二節を結び合わせると、五旬節期が明らかになる。かくして打ち立てられる構造は、まことに神妙である。その構造における五旬節期は、三天使の三段階を明瞭に示している。そこには「真理」の刻印が押されている。そこにはアルファでありオメガである方の刻印が押されている。そこにはパルモニの刻印が押されている。それは学ぶ者を至聖所の核心そのものへと導く。それは十四万四千の神殿を明らかにする。それは新しくされた地にまで及んでいる。

レビ記二十三章のこの真理は、リトマス試験および第三の試験に先立つ神殿の試験と関連して、今や封印が解かれつつある。第三の天使は1844年に到来し、次いで9/11に、さらに2023年にも再び到来した。1844年に第三の天使が到来したとき、忠実な者たちは、信仰によってキリストに従い、至聖所に入るべきであった。レビ記二十三章は至聖所へ至る道であり、神殿の試験の一要素を表している。ヨハネは、神殿を、またその中で礼拝する者たちを測るよう命じられた。

ミラーの宝石箱は神殿であり、その中の宝石はそこにいる礼拝者である。マラキ書の倉は神殿であり、その中の十分の一はそこにいる礼拝者である。レビ記二十三章の逐行的適用において表象される五旬節期は、十四万四千人の神殿を表す。さらに直接的には、覆いの

ケルビムが十戒、芽生えたアロンの杖、そして金のマナの壺に目を注いでいる契約の箱を示している。

覆うケルビムは天使であり、天使はメッセージと使者を象徴する。レビ記二十三章におけるアルファのメッセージは第七日安息日であり、オメガのメッセージは第七年の安息年である。いずれもメッセージであり、またウィリアム・ミラーおよびミラー派におけるアルファとオメガのメッセージでもある。「七つの時」が1798年に成就したことは第七年の安息年の象徴であり、1844年には神がご自身の民を至聖所へと導き、そこで彼らは第七日安息日を見出した。これら二つの安息日はレビ記二十三章における最初と最後の聖会であり、五旬節の時期はその二者の間に位置している。ちょうど、二体の覆うケルビムの間に契約の箱が据えられていたように。

神殿は測定されるべきであり、その測定には、異邦人に与えられた外庭を除外することが含まれる。日曜法において神の家に対する審判は終結し、異邦人に対する審判が開始する。異邦人の時は、1,260年の終わりである1798年に終結し、また、三日半（1,260の象徴）の終わりに、ヨハネは外庭を除外すべきであった。

そして、わたしに杖のような葦が一本与えられた。御使いが立って言った、「起きて、神の神殿と祭壇と、その中で礼拝する者たちとを測れ。しかし、神殿の外庭は除いて、これを測ってはならない。これは異邦人に与えられているからである。彼らは四十二か月の間、聖なる都を踏みにじるであろう。」ヨハネの黙示録 11:1, 2.

その庭は除外しておくことになっていた。なぜなら、それは三日半、または四十二か月のあいだそれを踏みにじった異邦人に与えられていたからである。

また、彼らは剣の刃に倒れ、捕囚として万国に連れ去られる。エルサレムは、異邦人の時の満ちるまで、異邦人に踏みにじられる。ルカ 21:24

異邦人の時は、ダニエル書の封印が解かれた1798年に満ちた。

エルサレムの神殿では、低い壁が外庭を、聖域の他の諸区画から隔てていた。この壁には、諸言語で、ユダヤ人以外の者にはこの境界を越えることが許されない旨を明記した銘文が刻まれていた。もし異邦人があえて内側の区域に立ち入ったなら、神殿を冒瀆したことになり、命をもってその罰を支払わねばならなかった。しかし、神殿とその奉仕の制定者であるイエスは、人間的同情の絆によって異邦人を御もとに引き寄せ、その神の恩寵によって、ユダヤ人が退けた救いを彼らにもたらした。

2023年12月31日をもって、2020年7月18日の失望からの三日半の預言的な日々は終結した。その三年半は、その時に預言的メッセージが解封されること、また、異邦人の時が成就し、神殿およびその中の礼拝者の計測においてはそれが除外されることを示している。五旬祭期にあつてペンテコステの日当たる日曜法の折に、審判は異邦人へと移行する。十四万四千人の神殿を測るにあたり、異邦人の時を除外すると、2023年12月31日から日曜法に至るまでがその神殿に当たることが見出される。

神殿の証しは、神殿が二段階で打ち立てられるということである。まず基礎が据えられ、次に、退けられた礎の石が驚くべきしかたで隅のかしら石となると、神殿は完成したものと認められる。基礎は、古代イスラエルが第一の勅令の時代にバビロンから出て来た

ときに据えられ、神殿は第二の勅令の時代に、しかし第三の勅令の前に、完成した。基礎に関する試練は2024年に起こり、われわれは今、神殿の試練の只中にある。その神殿の試練は、第三の、そしてリトマス試験において終わり、神殿の試練は神の民に神殿を測ることを要求する。

レビ記二十三章の神殿は、2023年12月31日から日曜法に至るまでの間に建て上げられ、その預言史の中には、預言の封印が解かれるときに常に起こる三つの試験が表されている。三つのうち最後のものはリトマス試験であり、それはエクセターのキャンプ集会によって表されていた。その集会において、あなたは、スノー長老が真の「真夜中の叫び」のメッセージを二度にわたって提示した天幕の会合に出席するか、あるいはウォータタウンの天幕で行われた感情的で均衡を欠いた会合に出席するかのいずれかであった。集会が終わると、真の「真夜中の叫び」のメッセージは怒濤のごとく広まった。エクセターはリトマス試験であり、このリトマス試験は封印を表している。

エクセターのキャンプ・ミーティングは、キリストのエルサレムへの凱旋入城によって予表されていた。また、イエスがお乗りになったろばをラザロが曳いた。ラザロの死は2020年7月18日の失望であったが、彼はまた、キリストの頂点をなす奇跡であり、その神性の「証印」でもあった。

もしキリストが病床におられたなら、ラザロは死ななかつたであろう。というのも、サタンは彼に対していかなる力も及ぼしえなかつたからである。いのちの与え主の御前では、死はその矢をラザロにねらい定めることはできなかつた。ゆえに、キリストはあえてそこに赴かず、離れておられた。彼は、敵がその力を行使するのを許された。後に、その敵を敗北者として退けるためである。彼はラザロが死の支配のもとを通過することをお許しになった。こうして、苦悩する姉妹たちは、自分たちの兄弟が墓に納められるのを見た。キリストは、彼女たちが兄弟の死に顔を見つめるとき、彼女たちの贖い主に対する信仰が厳しく試されることを知っておられた。しかし、今まさに彼女たちが通っているこの格闘のゆえに、彼女たちの信仰が、はるかに大いなる力をもって輝き出ることも知っておられた。彼は、彼女たちが耐え忍んだあらゆる悲嘆の痛みをも共に担われた。到来を遅らせられたからといって、彼女たちへの愛が少しでも減じたのではない。むしろ、彼は、彼女たちのため、ラザロのため、ご自身のため、そして弟子たちのために、勝利が得られることを知っておられた。

『あなたがたのために』、『あなたがたが信じるようになるために』。神の導きの御手に触れようと手を伸ばしているすべての者にとって、最大の落胆の時こそ、神の助けが最も近い時である。彼らは自らの道の最も暗い部分を、感謝の念をもって振り返るであろう。『主は敬虔な者をいかにして救い出すかを知っておられる』（第二ペテロ2章9節）。あらゆる誘惑とあらゆる試練から、主は彼らを、より堅固な信仰というそう豊かな経験をもって導き出される。

ラザロのもとへ来るのを遅らせられたのは、キリストが、ご自分を受け入れなかつた人々に対して憐れみのご計画をお持ちだったからである。彼はなおしばらくとどまられた。それは、ラザロを死からよみがえらせることによって、頑なで不信の民に対し、ご自分がまことに「よみがえりであり、いのちである」ことのもう一つの証拠をお与えになるためであった。彼は、この民、すなわちイスラエルの家の貧しくさまよう

羊に対する望みをすべて捨てることに、どうしても気が進まなかった。彼らが悔い改めないことのゆえに、彼の心は張り裂ける思いであった。その憐れみにおいて、彼は、ご自分こそが回復者、すなわちただお一人でいのちと不死を明るみにもたらし得る方であることを示す、もう一つの証拠を彼らに与えようと定められた。これは、祭司たちが曲解することのできない証拠となるはずであった。彼がベタニヤへ行くのを遅らせられたのは、このためであった。この頂点となる奇跡、すなわちラザロの復活は、彼の業とご自分の神性の主張に、神の印を押すことになるはずであった。『The Desire of Ages』528、529ページ。

凱旋入城は、キリストの御乗騎となるべき一頭の驢馬の繋ぎを解くことから始まった。

彼らがエルサレムに近づき、オリーブ山のベテパゲに来たとき、イエスは二人の弟子を遣わし、彼らに言われた。「あなたがたの向こうにある村へ行きなさい。すぐに、雌ろばが見つないであり、その子ろばが共にいるのを見いだすであろう。それらを解いて、わたしのもとに連れて来なさい。もしだれかがあなたがたに何かを言うなら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。そうすれば、その人はただちにそれらを送るであろう。」これはすべて、預言者を通して語られたことが成就するために起こったのである。「シオンの娘に告げよ、『見よ、あなたの王が、柔和で、ろばに乗り、また、ろばの子である子ろばに乗って、あなたのもとに来られる。』」そこで、弟子たちは出かけ、イエスが命じられたとおりに行った。マタイによる福音書 21:1-6

「真夜中の叫び」のメッセージは、最初の失望の時に到来していた第二の天使のメッセージと結合した。キリストの時代において、その失望はラザロの死であり、ミラー派にとっては1843年の予言の不成就であって、それは1844年4月19日に起こった。これら二つの失望は共に2020年7月18日を象徴している。

レビ記二十三章において表象される五旬節期において、試金石は、ラッパの祭り、キリストの昇天、そして大贖罪日の三重の道標によって示される。これら三つの段階は、基礎と神殿という最初の二つの試験に関して、その試金石を表す。これら三段階は、ペンテコステにおける日曜法の五日前に到来し、十四万四千人が旗印として高挙されることを表す。彼らとその試金石に合格すれば彼らは高挙されるが、そうでなければ、ミラーの夢の窓から吹き飛ばされる。

封印の第三の段階は贖罪日であり、それは罪のぬぐい去りを表す。第二の段階は、マラキ書におけるレビ人のささげものの高挙であり、第一の段階はラッパのメッセージである。1844年以来、人類は第七のラッパの吹鳴の歴史の中に生きてきた。第七のラッパの外的メッセージはイスラムの第三の災いのメッセージであり、内的メッセージは、キリストがご自身の神性を十四万四千の人性と結合させる御業である。

続きは次回の記事でお届けします。

預言者の著作には、古色蒼然としていながらも、われわれには新たな啓示の新鮮さと力をもって現れる情景が描かれている。信仰によって、われわれは、過去の諸時代において神がその民を取り扱ってこられたこれらの記録が、神が現今の経験を通してわれわれに教えようとしておられる教訓を見極めることができるように、保存されてきたのだと理解する。

私たちは、キリストの再臨直前の時期に少しも劣らぬほど重大な時代に生きている者として、キリストの初臨の時代のユダヤ人が犯したのと類似の過ちを犯すことのないよう、とりわけ慎重でなければならない。

礼拝の形式主義的な制度を次第に作り上げ、その中で非本質的な事柄の重要性を著しく強調したユダヤ人の指導者たちのように、今や一部の人々は、この世代に適用される重要な真理を見失い、新しく、奇異で、魅惑的なものを求める危険に陥っている。

高邁な原則を涵養し、堅持することが求められている。空想的な説を探し求め、これを唱道する者は、他者を教導しようとする前に、何が真理であるかについてまず教えを受けなければならない。人為的な理論や臆説を、真理として追い求めてはならない。

原則に対して鋼鉄のように忠実な者は多くおり、彼らは助けられ、祝福されるであろう。というのは、彼らは玄関の広間と祭壇との間で泣き、「主よ、あなたの民を憐れんでください。あなたの嗣業を辱めに渡さないでください」と言っているからである。私たちは、第三天使のメッセージの根本原則を、明確に、しかも判然と際立たせておかなければならない。私たちの信仰の大いなる柱は、その上に置かれうるあらゆる重みを、ことごとく支えうるであろう。

この誤謬と白昼夢と夢想の時代にあつて、わたしたちはキリストの教理の第一原理を学ばねばならない。使徒とともにこう言えるよう努めよう。「わたしたちは、わたしたちの主イエス・キリストの権能と来臨をあなたがたに知らせた際に、巧妙に案出された作り話に従ったのではない。」主は、崇高にして高邁な原則に従うよう、わたしたちを召しておられる。

真理、すなわち現在の真理は、神の御言葉がそれであると示すとおりのものである。主は、ご自分の民が一切の虚飾と、神秘主義に傾く一切のものから身を慎むことを望んでおられる。空想的・架空の教理に耽溺する誘惑を受けている者は、天の真理の鉱脈に豎坑を深く穿ち下ろし、それを受ける者にとって永遠のいのちを意味する宝を獲得せよ。御言葉のうちには最も尊い真理がある。これらは、熱誠をもって学ぶ者によって見いだされる。天の御使いたちがその探求を導くからである。

今、地上に生きている者たちを指して、パウロはこう宣言した。「時が来ると、人々は健全な教理に堪えられなくなり、自分たちの欲望に従って、耳がかゆくて自分たちのために多くの教師たちをかき集め、真理から耳を背け、作り話へと向けられるであろう。」

健全な教理に堪え忍ばない者たちについて彼が預言した折に、パウロが与えたその厳命は、なんと重大で、なんと魂を奮い立たせるものであったことか。「それゆえ、神の御前で、また、そのご顕現と御国とにおいて生ける者と死せる者とをさばかれる主イエス・キリストの御前で、あなたに厳粛に命じる。御言葉を宣べ伝えよ。時を得ても得なくても、これに励め。戒め、叱責し、あらゆる忍耐と教理とをもって勧めよ。」

神と交わる者は、義の太陽の光のうちを歩む。彼らは、神の前で自分の道を墮落させて、贖い主の名を汚すことはない。天の光が彼らを照らす。地上の歴史の終わりに近づくにつれ、キリストおよび彼に関する預言についての彼らの知識は大いに増し加わる。彼らは神の目には無限の価値がある。なぜなら彼らは御子と一致しているからである。

. 彼らにとって神の言葉は比類なく美しく、麗しい. 彼らはその重要性を悟る. 真理が彼らに開かれる. 受肉の教理は柔らかな光彩を帯びる. 聖書こそが、あらゆる神秘を解き明かし、あらゆる困難を解決する鍵であることを彼らは理解する. 光を受けることも光のうちに歩むことも望まなかった者たちは、敬虔の奥義を理解することができない. しかし、十字架を負ってイエスに従うことをためらわなかった者たちは、神の光のうちに光を見るであろう. 『サザン・ウォッチマン』 1905年4月4日.